

# 創立100周年を迎えた 愛知県製本工業組合 「新たな発想で力を発揮」 理事長ら、チャレンジ決意

大正八年十月十八日に名古屋製本業組合が創立され、その後改称した愛知県製本工業組合は今年、一〇〇周年を迎え、九月に名古屋市内で記念式典を開催する。紙を綴じて印刷、出版物を世に送り出し続けてくれたおかげで、我々は活字の世界を手軽に安心して楽しむことができる。組合の稲川俊一理事長（六十歳）と、記念式典の実行委員長を務める伊藤光昌副理事長（七十二歳）に業界の過去と未来について語ってもらった。

「わが国の製本の起源は奈良、平安時代の日本書紀、古事記などの和綴りに遡ることができます。そして糸かがり、無線綴じ、中綴じなど、長い歴史の中で製本技術を磨き、洗練させてきました。この伝統文化はそう簡単にはなくならない、なくしてはいけません」と思っています。父親と初の親子理事長となった稲川理事長は、一〇〇〇年を超す製本文化の歴史を守り続けてきた自負をのぞかせる。一〇〇年の間に組合の名称は三回変わったが、戦時下の軍による統制時代も愛知県製本紙工業組合として活動を続けたという。

「一九二三（大正十二）年の関東大震災で、東京の出版印刷業界は壊滅的な被害を受け、その結果、製本業も名古屋をはじめ広く地方に広がったと、組合の元理事長から聞きました」。

製本は裁断、折り、丁合、綴じ、仕上げの工程をたどる。製本という言葉に馴染みがなくても、単行本、最近人気の御朱印帳や子供の絵本などを手に取ると特色のある製本技術が施されていることに気づく。そして紙質と相まって豊かな個性、手ざわり感を味わうことができ、製本の魅力に感謝の気持ちと興味がわいてくる。

「業界の現状は厳しいですね。デジタル化の波が押し寄せ、バブルがはじけたことが一つの節目。七年前の東日本大震災では東北が主要な生産拠点だったためナフサと紙パルプが入手困難となり、業界全体に影響が出ました」と稲川理事長。天災のたびに被災者とともに苦難を乗り越えてきた業界といえるかもしれない。